第2回 日本スイス友好コンサート

独唱

Judith Graf ユーディット・グラフ(ソプラノ)

Marion Ammann マリオン・アンマン(メゾソプラノ)

佐野　成宏 (テノール)

灘井　誠 (バス)

合唱

レアゲザングフェライン (スイス・ビール市)

テアターコア (スイス・ビール市)

京都混声合唱団

大阪第一合唱団

真声会合唱団

管弦楽

京都市交響楽団

合唱指揮

蔵田裕行

トーマス・クスター

納多正明

阪 哲朗 指揮

VERDI Requiem

ザ・シンフォニーホール

'97 7.25 (金) 開場 PM6:00 開演 PM7:00

京都コンサートホール

'97 7.27 (日) 開場 PM2:00 開演 PM2:30

主催：大阪第一合唱団

後援：在大阪スイス総領事館／外務省／大阪府／大阪市／スイス・ビール市／関西・日本スイス協会

協賛：株式会社SMHジャパン／コスモスクエア国際交流センター

芸術文化振興基金助成事業／大阪市助成公演

ビール市
レアゲザングフェラインと
テアターコアの皆様へ

大阪市とビール市の間の友好のきずなが、
この度の皆様の来阪によって、さらに深められることとなり、
とても喜ばしく思います。

２年前の大阪第一合唱団によるスイスでの公演に引き続き、
今年はスイスから招かれた皆様が、
ソプラノのユーディット・グラフさん、
メゾソプラノのマリオン・アンマンさんと共に
大阪、京都で公演することになりました。
日本側からは指揮者の阪哲朗さん、
テノールの佐野成宏さん、バスの灘井誠さん、
そして京都混声合唱団、大阪第一合唱団、真声会合唱団、京都市交響楽団の皆さんが
ヴェルディのレクイエムで共演します。
これに続いて、ユーディット・グラフさんのソプラノリサイタルが行われます。
２つの都市が音楽を通じて育んだ友好関係が、
このコンサートを機にクライマックスを迎えるのです。

日本経済、文化の中心地である大阪と京都で、
同胞である皆様をお迎えできることを、
この上なく誇りに思います。
音楽に国境はありません。
このような芸術を通じた出会いが、
相互理解を深めるために何よりも大切なのです。
今回の交流コンサート実現のために
御尽力下さった関係者の皆様方に心から感謝しております。
特に、寛大なる御援助を頂戴したＳＭＨ社に深く御礼申し上げます。

この日本公演の御成功をお祈り申し上げます

スイス総領事　ベアト・ホイス

Der Lehrergesangverein und Theaterchor Biel zu Gast im Kansai

Es freut mich sehr, dass die seit Jahren bestehenden guten Beziehungen
im musikalischen Bereich zwischen Osaka und Biel
mit dem Besuch des Lehrergesangvereins und des Theaterchors Biel
weiter gefestigt werden.
Nach dem vor zwei Jahren der Dai-ichi Chor aus Osaka in der Schweiz
auftreten konnte, sind dieses Jahr
die Schweizer Sängerinnen und Sänngerzu Gast in Osaka und Kyoto.
Sie werden begleitet von Judith Graf, Sopran,
und Marion Ammann, Mezzosopran.
Ein wahres Musikvergnügen erwartet uns,
werden sie doch zusammen mit Shigehiro Sano, Tenor, Makoto Nadai, Bass,
dem Osaka Dai-ichi Chor, dem Kyoto Mixed Choir, dem Shinseikai Choir
und dem Kyoto Philharmonic Orchestra
unter der Leitung von Tetsuro Ban das Requiem von Verdi auffhüren.
Zudem werden wir in den Genuss eines Rezitals mit Judith Graf kommen.
Damit ist zweifellos ein bisheriger Höhepunkt der so fruchtbaren Beziehungen
zwischen den Musikfreunden der beiden Städte erreicht.

Für mich ist es eine grosse Ehre und Freude,
meine Landsleute in den japanischen Wirtschafts- und Kulturmetropolen
Osaka und Kyoto willkommen heissen zu dürfen.
Mehr als anderswo wird es uns in diesem so fremden Land bewusst,
dass die Musik keine Grenzen kennt.
Kulturelle Begegnungen dieser Art sind deshalb
für das gegenseitige Verständnis ganz besonders wichtig.
Als Vertreter eines Landes mit einer sehr aktiven Musikszene
aber mit bescheidenen Mitteln,
um sie international entsprechend bekannt zu machen,
weiss ich die Initiative die zu dieser Japantournee führte zu schätzen.
Allen die dazu beitrugen, dass dieses Projekt realisiert werden konnte,
möchte ich an dieser Stelle meinen aufrichtigen Dank aussprechen.
Ganz besonders sei hier der Firma SMH für ihre grosszügige Unterstützung gedankt.

Allen Teilnehmerinnen und Teilnehmern wünsche ich eine erfolgreiche Japantournee
und allen Zuhörern einen uneingeschränkten Musikgenuss.

Beat Heuss
Schweizerische Generalkonsul in Osaka

Giuseppe Verdi(1813-1901)
ジュゼッペ　ヴェルディ

Messa da Requiem

死者の為のミサ曲

per quatro voci soliste,coro e orchestra
４人の独唱者、合唱と管弦楽のための

No.1 Requiem　永遠の安息を・入祭唱

Requiem ・・・・・・・・・・・ coro
Kyrie ・・・・・・・・・・・・ coro,soli

No.2 Dies irae　怒りの日・続誦

Dies irae ・・・・・・・・・・ coro
Tuba mirum ・・・・・・・・ coro, basso
Liber scriptus ・・・・・・ mezzo-soprano, coro
Quid sum miser ・・・・・・ soprano, mezzo-soprano, tenore
Rex tremendae ・・・・・・ soli, coro
Recordare ・・・・・・・・ soprano, mezzo-soprano
Ingemisco ・・・・・・・・ tenore
Confutatis ・・・・・・・・ basso, coro
Lacrymosa ・・・・・・・・ soli, coro

No.3 Offertorium　主イエス・奉献文

Domine Jesu Christe・・・・ soli
Hositas ・・・・・・・・・・ soli

No.4 Sanctus　聖なるかな・三聖唱

Sanctus ・・・・・・・・・・ doppio coro

No.5 Agnus Dei　神の子羊・神羊唱

Agnus Dei ・・・・・・・・ soprano, mezzo-soprano, coro

No.6 Lux aeterna　永遠の光を・聖体拝領唱

Lux aeterna ・・・・・・・・ mezzo-soprano, tenore,basso

No.7 Libera me　我を許し給え・赦禱唱

Libera me ・・・・・・・・ soprano, coro
Dies irae ・・・・・・・・・・ soprano, coro
Requiem aeternam ・・・・ soprano, coro
Libera me ・・・・・・・・ soprano, coro

指揮
阪　哲朗
Tetsuro Ban

1968年、京都生まれ。京都市立芸術大学にて作曲を学ぶ。廣瀬量平、北爪道夫、前田守一、藤島昌壽の各氏に師事。在学中より関西二期会、喜歌劇楽友協会など各種オペラグループでアシスタントコンダクターとして研鑽を積む。1990年ウィーン国立音楽大学指揮科に入学。K.エステルライヒャー、L.ハーガー、湯浅勇治の各氏に師事。1992年には、スイス（ベルン州）ビール市立歌劇場専属指揮者に就任。現在までに同劇場において200をこえるオペラ公演を指揮。その他サマーコンサートやガラコンサートにも出演。また1992年～1994年、L.バーンスタインの提唱により設立されたPMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル）にM.T.トーマス（サンフランシスコ交響楽団音楽監督）、C.エッシェンバッハ（ヒューストン交響楽団音楽監督）のアシスタント・コンダクターとして参加。同音楽祭演奏会に出演。1993年、大阪第一合唱団主催オペラ「カルメン」を指揮。1994年、『第50回ジュネーブ国際指揮者コンクール』のセミファイナリストとしてコンサートを指揮。1995年、『第１回日本スイス友好コンサート』（ベートーベン・第九交響曲）を指揮。同年、新進指揮者の登竜門である『第44回ブザンソン国際指揮者コンクール』で優勝。同年10月にフランス国立トゥールーズ市管弦楽団を指揮してフランスデビューを飾りフランス国立マルセイユオペラ座管弦楽団を指揮。翌年には、ホーフ市立歌劇場でドイツデビューを果たす。1996年、京都府より第14回京都府文化賞奨励賞を受賞。その後も、ナンシー、ストラスブール、ロワールでの客演に続き、国立リール管弦楽団（フランス）、ルツェルン交響楽団（スイス）、ウィーン室内管弦楽団（オーストリア）、ヒューストン交響楽団（アメリカ）、St.ペテルブルク・フィルハーモニック管弦楽団〈旧レニングラードフィル〉などヨーロッパ各地で演奏会に出演。日本では1996年5月、東京シティフィルハーモニック管弦楽団の定期演奏会、8月、読売交響楽団オペラガラコンサートなどで指揮を行った他、各オーケストラへの出演を続ける。また1997年にはアンサンブル神戸音楽監督に就任。現在、ビール市立歌劇場専属第一指揮者、ビール市交響楽団専属指揮者、ビール市立音楽院オペラ科講師。1997年8月よりドイツ・ブランデンブルク市立歌劇場専属第一指揮者に就任予定。

ソプラノ
ユーディット・グラフ
Judith Graf

スイス生まれ。チューリッヒ音楽院、ジュリアード音楽院にて声楽を学ぶ。1990年、バーゼル・オペラスタジオを最優秀の成績を得て卒業。ビール市立歌劇場、シュトゥツガルト国立オペラ劇場、プフォルツハイム市立劇場、バーゼル劇場、ザルツブルク州立劇場など、数多くの劇場でオペラに出演し、スイスを中心に活躍するオペラ歌手、ソリストとして、高い評価を得ている。タティアーナ「エヴゲーニイ・オネーギン」(チャイコフスキー)、ポッペア「ポッペアの戴冠」(モンテヴェルディ)、作曲家「ナクソス島のアリアドネ」(R.シュトラウス)、フィオルディリージ「コシ・ファン・トゥッテ」(モーツァルト)、パミーナ「魔笛」(モーツァルト)などをはじめとする多数のオペラに出演。ミサ曲、オラトリオのソリストとしても活躍している。また、歌曲の分野でも幅広いレパートリーを持っている。

メッゾソプラノ
マリオン・アンマン
Marion Ammann

チューリッヒで生まれ育ち、シールスで講習を受け、ヴェルナー・クオーニ氏およびルキウス・ジュオン氏のもとで、初めて声楽を学ぶ。ヘルマン・フィッシャー氏に声楽と教会音楽を師事。さらに、1991年、教師の資格を得た後、チューリッヒでヘレン・ヘーフェ氏に師事。またエディット・マティス氏、エルンスト・ヘフリガー氏、またヘルムート・リリング氏、マリア・ヴェヌーティ氏の特別指導を受ける。オルフェスト・トリオ・コーラス会員。ミグロス奨学生。1992年、スイス・グラウビュンデン州の奨励賞を受賞。世界の舞台ではまだ無名ながら、オペラアリア、歌曲、宗教曲など、多彩な分野で幅広いレパートリーを持っており、深い響きに満ちた柔らかな声質と優れた歌唱表現力には、世界を舞台にした今後の活躍を大いに予感させるものがある。

テノール
佐野成宏
Shigehiro Sano

東京芸術大学卒業。アリーゴ・ポーラ、東敦子、原田茂生、鹿野道男の各氏に師事。1992年イタリア声楽コンソルソ第1位ミラノ大賞受賞。1993年フランチェスコ・ヴィニャス国際コンクール第3位、1994年ジャコモ・アラガル国際コンクール第3位ブラシド・ドミンゴ国際声楽コンクール入賞、ルチアーノ・パヴァロッティ国際コンクール入賞などをはじめ、欧米各地の数々のコンクールで受賞。第8回グローバル東敦子賞第24回ジローオペラ新人賞受賞。1993年イタリアのフォルリで、オラトリオ「アベーレ(L'Abele)(世界初演)にアベーレ役で出演し、その後、この演奏はCDリリースされる。1995年2月にはミラノにて「ラ・ボエーム」のロドルフォ役でデビュー。このオペラは4月にファエンツァのテアトロ・マジーニにて再演される。現在、アリゴ・ボイド音楽院(イタリア・パルマ)に留学中。

バス
灘井　誠
Makoto Nadai

京都市立芸術大学、ウィーン国立音楽大学卒業。リートではE・ヴェルバ、W・モーア両氏に師事。オペラではアレクサンダー・コロー、発声ではルイゼ・シャイトの各氏に師事。また蔵田裕行、佐々木成子、住吉武の各氏に師事。関西二期会オペラ「マルタ」のプランデット役でデビュー。以後、「こうもり」「ラ・ボエーム」「フィガロの結婚」「コジ・ファン・トゥッテ」「春琴抄」「耳なし芳一」等に出演し高い評価を得る。特にヴェルディのオペラ「椿姫」のジョルジョ・ジェルモンおよび「リゴレット」のタイトルロールでは、豊かな表現力を特筆される。また平安建都1200年式典では御前演奏を行なう。その他リサイタルをはじめ、第九やオラトリオのソリストとしても活躍。童謡からリート、オラトリオ、現代曲まで幅広いレパートリーを持つ。現在、関西二期会会員、日本シューベルト協会同人。

合唱　レアゲザングフェライン
Lehrergesangverein

トーマス・クスター率いる合唱団。団員数は約80名である。合唱付管弦楽コンサートで活躍するかたわら、さまざまな合唱曲の小品にも意欲的に取り組んでおり、幅広いレパートリーにチャレンジしている。ここ数年、その活躍はめざましく、特に J.S. バッハの「ロ短調ミサ」カール・オルフの「カルミナ・ブラーナ」、ハイドンの「天地創造」は有名である。1995年5月の第１回 日本スイス友好コンサートに出演。今回は第２回日本スイス友好コンサートのため、スイスより来日している。

合唱　京都混声合唱団
Kyoto Konsei Chorus

1926年、京都在住の同声会（東京音楽学校／現・東京芸術大学音楽学部同窓会）のメンバーを中心に結成され、合唱音楽の普及に努める。第二次大戦中、一時活動の中断があったものの、1945年にはアマチュア合唱団として活動を再開した。団員の職業・年齢は多岐にわたる。1975年創立50周年記念演奏会に京都市交響楽団の協力を得たことを契機として、爾来、同楽団との協演による数々の宗教曲の大曲を上演。過去10回ほどの定期演奏会では、モーツァルト、フォーレ、ドヴォルザークなどの「レクイエム」,バッハの「マタイ受難曲」、ハイドンの「天地創造」などを演奏。昨年は創立70周年記念演奏会としてハイドンの「四季」を歌う。また、国内・海外の合唱団との交歓演奏会も開催してきた。1985年創立60周年には、記念演奏会の上演と共に「京都混声合唱団60年史」を刊行し、我が国音楽史の貴重な資料となっている。今日まで藤堂音楽賞、京都新聞社賞、京都府合唱連盟賞など、永年の合唱活動に対して数多くの表彰を受ける。
常任指揮者は蔵田裕行（京都市立芸術大学教授、同校音楽部長）、ヴォイストレーナーは三井ツヤ子（京都市立芸術大学助教授）。

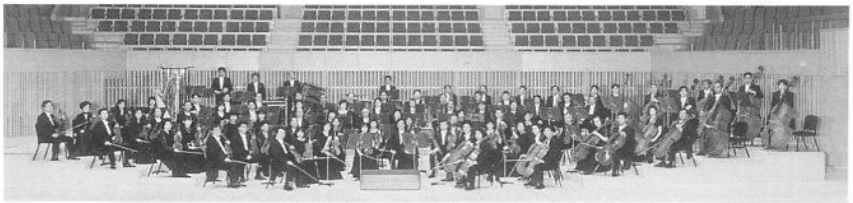
合唱　真声会合唱団
Shinseikai Chorus

1989年、京都市交響楽団（大谷直人指揮）「第九」出演を契機に結成される。団員は京都市立芸大の卒業生のみで結成され、当初より今回のバスソリスト灘井誠氏の指揮のもとに活動を続け、今年で8年目を迎える。合唱団としてはメンバーが少ない（在籍22名）ことが弱点であるが、幸いメンバーの変動が少なく、全員が同窓生でもあるのでまとまりやすいうえ、専門教育を受けた団員ばかりのため、自主練習時もリーダーには事欠かない。今後は少人数のデメリットを克服するため、メンバー個々が体を楽器として充分に響かせ、楽曲に創造的な命を吹き込むべく、心を合わせたいと願っている。ヴェルディのレクイエムは宗教曲の形を取ってはいるが、人間存在の根源そのものに問いかける壮大なドラマであり、団員一同、真摯にそして深い思いを込めて演奏に臨みたいと思っている。
活動歴は以下の通りである。1989年：京都市交響楽団「第九」に出演／1990年：真声会合唱団として発足／1991年：箏曲演奏会に客演／1992年：真声会総会演奏会に出演／1993年：勤労音楽祭に客演／1994年：第一回定期演奏会／1995年：真声会40周年記念演奏会に出演／1996年：ウィリアム・ウー氏リサイタルに出演／1996年：第二回定期演奏会（第十回京都芸術祭）

合唱　大阪第一合唱団
Osaka Dai-ichi Chor

1963年創立の、アマチュア混声合唱団。これまで合唱曲を中心とした定期演奏会を数多く行うと共に、オペラの主催や出演、大阪フィルハーモニー交響楽団や大阪センチュリー交響楽団などとの共演を行っている。また、日本の代表的な作曲家の協力を得て、『平和』を題材とする新曲や合唱劇の初演に継続して取り組むなど、幅広い音楽活動を続けている。林光氏の作品も継続して演奏しており、1998年秋には３回目の初演作品演奏予定。
さらに1988年にはドイツ（フライブルク）1990年にはロシア（モスクワ、ペルミ）で演奏会を成功させ、また1993年には創立30周年記念公演として、阪哲朗氏指揮によるグランドオペラ『カルメン』を大阪で主催上演。各方面から注目を浴びた。このオペラ『カルメン』での阪哲朗氏との出会いをきっかけに、1995年には阪氏のホームグラウンドであるスイス・ビール市にて、第１回日本スイス友好コンサートを開催。日本の歌などで構成した第１ステージを上演すると共に、スイス・ビール市交響楽団、および今回来日しているレアゲザングフェライン、テアターコアの２つの合唱団とベートーベン『交響曲第九番』を演奏。スタンディングオヴェーションで迎えられる大成功をおさめた。スイス・ビール市をはじめ、海外公演を行った地の人々との友情は現在も途切れることなく続いており、音楽を通じた市民レベルの国際交流は、年々その輪を広げている。
常任指揮者、納多正明。団員数117名。

管弦楽　京都市交響楽団
Kyoto Symphony Orchestra



市民文化の形成、青少年の情操を高めるために、古都・京都の新しい文化創造の担い手として1956年に自治体直営のオーケストラとして創立された。故カール・チェリウス（初代常任指揮者）の厳しい練習の伝説的な時期があった。二期会（在東京オペラ集団）との提携で、1959年「モーツァルト・オペラシリーズ」で全国を演奏旅行し、高い評価を受け、多くの音楽賞を受賞した。その当時は楽団の編成がやや小さかったので「モーツァルトの京響」として知られていた。しかしながら、ハンス・ヨアヒム・カウフマン（第2代常任指揮者）と故森正（第3代常任指揮者）の両者により、レパートリーは近代・現代音楽にまで広げられ編成もフルサイズに拡大された。1967年から1971年の間は、第100回記念定期演奏会でストラヴィンスキーの3大バレエ音楽を取り上げて好評を博した外山雄三（第4代常任指揮者）と、京響で最初のレコーディング（シベリウス「交響曲第2番」他）を成功させた故渡邊暁雄に率いられて日本全国で多くの演奏会を行った。山田一雄（第6代常任指揮者）／京響は、オネゲル「ダビデ王」を初演し、選曲にオリジナリティーを示しはじめた。1973年から毎年、京都市は著名な邦人作曲家に京都をテーマにした作品を委嘱している。それらの作品の中にはレコーディングされ「日本レコードアカデミー」を受賞したものもある。現在の京響は87人の演奏家を配して、毎年10回の定期演奏会と6回の特別演奏会やオペラ公演、全国各地での依頼公演など年間約90ステージをこなしている。さらに市民の幅広い音楽文化の定着を目的とした「京響巡回コンサート」や「市内・小中学生のための音楽鑑賞教室」は、楽団運営の柱として約30ステージの活動を行っている。1989年に京響発展のための新練習場が完成し、翌90年には第9代音楽監督・常任指揮者に気鋭の井上道義を迎え、充実度を年々増している。さらに1995年からは指揮陣に大友直人が加わった。そして同年秋に「京都コンサートホール」が新しくオープンし、京都市交響楽団は演奏の拠点としてのライセンスを得た。1996年には楽団創立40周年を迎え最適の環境と最高の音響設備に恵まれた中で増々の飛躍を期して健闘中である。さらに1997年5月にはヨーロッパ公演を行い、プラハの春国際音楽祭、ギリシャのテッサロニキでのＥＵジャパン・フェスト、ウィーン公演をはじめ全5ヵ国での公演を行った。今、日本で最も注目を集めているオーケストラである。

REQUIEM

(1)Requiem	Requiem aeternam dona eis, Domine:	主よ、永遠の安息をかれらに与え、
	et lux perpetua luceat eis.	絶えざる光をかれらの上に照らし給え。
	Te decet hymnus, Deus in Sion;	ふさわしきかな、シオンにて神を讃え、
	et tibi reddetur votum in Jerusalem:	エルサレムにて誓いを果たすこと。
	exaudi orationem meam,	わたしの祈りを聴き入れ給え。
	ad te omnis caro veniet.	全ての肉は主のもとに至る。
	Requiem aeternam dona eis, Domine,	主よ、永遠の安息をかれらに与え、
	et lux perpetua luceat eis.	絶えざる光をかれらの上に照らし給え。
(2) Kyrie	Kyrie eleison;	主よ、あわれみ給え。
	Christe eleison.	キリストよ、あわれみ給え。
	Kyrie eleison.	主よ、あわれみ給え。

DIES IRAE

(1) Dies irae	Dies irae, dies illa	かの日こそ怒りの日である
	solvet saeclum in favilla,	世の全て灰に帰る
	teste David cum Sibylla.	ダヴィドとシビッラの預言のとおり。
	Quantus tremor est futurus,	審判者が降り来たりて、
	quando judex est venturus	おごそかに正したならば、
	cuncta stricte discussurus.	恐れおののきはどれほどであろうか。
(2) Tuba mirum	Tuba mirum spargens sonum	ラッパの音、この世の墓の上に
	per sepulchra regionum	くすしくも響きわたりて
	coget omnes ante thronum.	全ての人は玉座の前に集められるだろう。
	Mors stupebit et natura,	死と自然界はおどろくであろう。
	cum resurget creatura	造られし人がよみがえるとき
	judicanti responsura.	審判者に答えるため、
(3) Liber scriptus	Liber scriputs proferetur,	全ての事を書き記した
	in quo totum continetur	世を裁く裁きの書物は
	unde mundus judicetur.	神の御前に差し出されるであろう。
	Judex ergo cum sedebit	裁き手の玉座の前に、
	quidquid latet apparebi;	隠されたことはことごとく知られ、
	nil inultum remanebit.	あらゆることが裁かれるであろう。
	Dies irae, dies illa	かの日こそ怒りの日である
	solvet saeclum in favilla,	世の全て灰に帰る
	teste David cum Sibylla.	ダヴィドとシビッラの預言のとおり。
(4) Quid sum miser	Quid sum miser tunc dicturus,	あわれ、私は何を答え
	quem patronum rogaturus,	誰に弁護を求めようか。
	cum vix justus sit securus?	義人すらおののく時に
(5) Rex tremendae	Rex tremendae majestatis	おそるべきみいつの大王よ、
	qui salvabdos salvas gratis	無償なる救いの恵み
	salva me, fons pietatis.	我にも給え、恵みの泉。
(6) Recordare	Recordare, Jesu pie,	いつくしみ深きイエス
	quod sum causa tuae viae,	御身が来たりしは、私のためでもあった。
	ne me perdas illa die.	思い給え、かの日に私の名を。
	Quaerens me, sedisti lassus,	私のあとを求めて疲れ、
	redemisti crucem passus;	十字架に私をあがなった
	tantus labor non sit cassus.	苦しみなどをむなしくし給うな。
	Juste judex ultionis,	御身こそは審判者なれ
	donum fac remissionis	かの日がまだこない間に
	ante diem rationis.	赦しの恵みを与え給え。
(7) Ingemisco	Ingemisco tanquam reus,	罪ゆえに私は嘆き
	culpa rubet vultus meus;	咎ゆえに私は恥じらう。
	supplicanti parce, Deus.	神よ、請い願う私を赦し給え。
	Qui Mariam absolvisti	罪深き（マクダラの）マリアを赦し
	et latronem exaudisti,	盗賊の祈りを聴きて、
	mihi quoque spem dedisti.	私にも希望を与え給もうた。
	Preces meae non sunt dignae,	私の祈りはふさわしくはないが、
	sed tu, bonus, fac benigne,	守り給え、慈悲をもって、
	ne perenni cremer igne.	永劫の滅びの火より。
	Inter oves locum praesta	羊の群に私の名前を加え、
	et ab hoedis me sequestra,	山羊の群より私を引きはなし
	statuens in parte dextra.	御身の右に立たし給え
(8) confutatis	Confutatis maledictis,	呪われた者は恥じ入り、
	flammis acribus addictis,	火に入ろうとするとき、
	voca me cum benedicts.	祝されし者と共に我が名を呼び給え。
	Oro supplex et acclinis,	私の心は灰のように
	cor contritum quasi cinis,	萎えくだけ、祈り願う。
	gere curam mei finis.	私の終わりを見守り給え。
	Dies irae, dies illa	かの日こそ怒りの日である
	solvet saeclum in favilla,	世の全て灰に帰る
	teste David cum Sibylla.	ダヴィドとシビッラの預言のとおり。

(9) Lacrimosa	Lacrimosa dies illa,	かの日こそ涙の日である、
	qua resurget ex favilla	罪人の裁きを受けんと、
	judicandus homo reus:	灰のなかからよみがえる時。
	huic ergo parce, Deus.	神よ、かれに赦しを与え給え。
	Pie Jesu, Domine,	慈しみ深き主、イエズス、
	dona eis requiem.	かれらに安息を与え給え。
	Amen.	アーメン

OFFERTORIUM

(1) Domine Jesu	Domine Jesu Christe, rex gloriae.	主イエス・キリスト、栄光の王。
	Libera animas omnium fidelium defunctorum	すべての死せる信者の魂を
	de poenis inferni, et de profundo lacu.	地獄の罰と深き淵より救い給え。
	Libera eas do ore leonis,	彼らを獅子の口から救い、
	ne absorbeat eas tartarus,	黄泉の刑場に飲み込まれ
	ne cadant in obscurum:	闇に落ち込むことを許し給うな。
	sed signifer sanctus Michael	聖ミカエルが、旗をかかげ
	repraesentet eas in lucem sanctam:	聖なる光にかれらを導き、
	quam olim Abrahae promisisti	かつてアブラハムに約束されたことを
	et semini ejus.	その子孫にも果たし給え。
(2) Hostias	Hostias et preces tibi, Domine,	主よ、賛美のいけにえと
	laudis offerimus:	祈りをささげ奉る。
	tu suscipe animabus illis,	かれらの魂を受け入れ給え。
	quarum hodie memoriam facimus:	私たちはその人々の記念する
	fac eas, Domine, de morte transire ad vitam,	主よ、彼らを死から生へと移し給え。
	quam olim Abrahae promisisti	かつてアブラハムに約束されたことを
	et semini ejus.	その子孫にも果たし給え。

SANCTUS

Sanctus,sanctus,sanctus,	聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。
Dominus Deus Sabaoth!	万軍の主なる神。
Pleni sunt coeri et terra gloria tua.	主の栄光は天地に満ちる。
Hosanna in excelsis!	天のいと高きところにホザンナ。
Benedictus qui venit in nomine Domini.	祝せられ給え、主の名によりて来る者は。
Hosanna in excelsis!	天のいと高きところにホザンナ。

AGNUS DEI

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:	神の子羊、世の罪を除き給う主よ。
dona eis requirm.	かれらに安息を与え給え。
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:	神の子羊、世の罪を除き給う主よ。
dona eis requirm.	かれらに安息を与え給え。
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:	神の子羊、世の罪を除き給う主よ。
dona eis requirm sempiternam.	かれらに永久の安息を与え給え。

LUX AETERNA

Lux aeterna luceat eis, Domine;	主よ、絶えざる光を彼らの上に照らし、
cum sanctis tuis in aeternum:	聖徒とともに永遠にあられますように
quia pius es.	慈悲深き主よ。
Requiem aeternam dona eis, Domine,	主よ、永遠の安息をかれらに与え、
et lux perpetua luceat eis	絶えざる光をかれらの上に照らし給え
cum sanctis tuis in aeternum;	聖徒とともに永遠にあられますように
quia pius es.	慈悲深き主よ。

LIBERA ME

(1) Libera me	Libera me, Domine, de morte aeterna	主よ、私を永遠の死より救い給え
	in die illa tremenda:	かの恐ろしき日に。
	quando coeri movendi sunt et terra,	天と地の震え動く時、
	dum veneris judicare saeculum per ignem.	火をもって世を裁くために来られる時。
	Tremens factus sum ego et timeo,	私は恐れおののく、
	dum discussio venerit atque ventura ira.	来るべき怒りの日、ふるい分けられる時
	Quando caeli movendi sunt et terra.	天と地の震え動く時。
(2) Dies irae	Dies irae, dies illa,	かの日こそ怒りの日
	calamitatis et miseriae,	災いと不幸の日、
	dies magna et amara valde.	大いなる嘆きの日。
	Dum veneris judicare saeculum per ignem.	火を持って世を裁くために来られる時。
(3) Requiem aeternam	Requiem aeternam dona eis, Domine,	主よ、永遠の安息をかれらに与え
	et lux perpetua luceat eis.	絶えざる光を彼らの上に照らし給え。
(4) Libera me	Libera me, Domine.....	主よ、私を・・・・・・

［参考］ Cassell's LATIN DICTIONARY／旧新約聖書（ドンボスコ社）／音楽事典（平凡社）

合唱出演者

LEHRERGESANGVEREIN ／THEATER CHOR
レアゲザングフェライン／テアターコア（スイス・ビール市）

ソプラノ
Elisabeth Flück
Marianne Grossenbacher
Maya Hefti
Regula Kuster
Anne-Rose Micciché
Erika Römer
Christine Savolainen
Barbara Schwab-Segessemann
Anita Richener-Tschantré
Marianne Zesiger

アルト
Christina Brun del Re
Rosmarie Mumenthaler
Sonja Rohrbach
Barbara Rohrer
Ursula Zahnd
Antia von Däniken

テノール
Thomas Kuster
Kurt Schwab
Thomas Schwab

バス
Willy Ramseier
André Wegmann

KYOTO KONSEI CHORUS
京都混声合唱団

ソプラノ

アルト

テノール

バス

団員募集

京都混声合唱団

連絡先：桂　京造　（０７５）２１１－３０６４

数ある京都の一般合唱団の中で最も歴史があり、西洋の宗教大曲を中心とした、独自の演奏活動を行っています。８月より、来春予定の定期演奏会ロッシーニ「ミサ・ソレムニス」の練習を開始します。

常任指揮者：**蔵田裕行**（京芸大教授）
ヴォイトレ：三井ツヤ子（京芸大助教授）
ピアニスト：宮北昌子

通常練習　毎週金曜日　午後７：００～９：１５
ヴォイストレーニング　毎月１回（日曜日午後）
京都府薬剤師会館２階ホール（東山五条上ル東側）
入団費 1000 円の他、月額団費として
高校生 1000 円　大学生 1500 円　一般 3000 円

SHINSEIKAI CHORUS
真声会合唱団

ソプラノ

アルト

OSAKA DAI-ICHI CHOR
大阪第一合唱団

ソプラノ

アルト

テノール

バス

団員募集

創立35周年記念演奏会《林光氏を迎えて》
1998年11月　いずみホール（予定）

定例練習日　毎週水曜日　18時30分～21時
練習会場　大阪フィルハーモニー会館
（地下鉄四ツ橋線・岸ノ里駅下車）
団　　費　月3,000円（他に積立金 500 円あり）
各種割引もあります。
連絡先　0720-47-7357 木越（きごし）

常任指揮者
納多正明（関西二期会）

ピアニスト
中村佳世子

入団テストはありません。

大阪第一合唱団

ヴェルディのレクイエムについて

チェロの下降旋律とつぶやくような男声合唱によって曲が始まります。下降旋律はあたかも魂が陰府へ行くかのごとくであり、「Requiem...」の歌詞は魂が眠りにつくようです。それは神への祈りにも聞こえます。同時に親しい人を失い呆然とする様にも聞こえます。

キリスト教の教えによれば、人間は死ぬと土にもどります。しかしその霊魂はいったん眠りにつくだけです。全世界が大混乱する「終末」の後、「最後の審判の日」に復活がなされます。悪行をした人は地獄へ行き、善行をした人は天国で永久に生き続けることができるのです。レクイエムは、最後の審判の日に新しい都《天国》へ迎え入れられるように祈る宗教儀式《死者のためのミサ》のための音楽です。このミサは諸死者の記念（１１月２日）、葬儀や周忌などに執り行われます。ヴェルディのレクイエムはマンゾーニの一周忌にサン・マルコ教会で初演されています。この《死者のためのミサ》は、「成仏しいや」とか「いいひとやったなぁ」という死を悼み悲しむ儀式ではありません。そもそも一神教のキリスト教には先祖崇拝はありません。このミサは死者を祀るものではなく、死者が（私をも含めて）「天国へ迎えられるように」と、唯一なる神に祈るものです。死者とも復活の後は再会できるのですから、悲しいという感情はあまりないのかもしれません。

この終末から最後の審判のくだり（ヨハネの黙示録）はかなり過激です。神の右手にある書物の７つの封印が解かれ、神がラッパを７人の大天使に与えます。ラッパが鳴る度に、火が降り注ぎ、海が血に変わり、星が落下し、太陽が無くなり、人を殺す４人の天使に.....ああ恐ろしい。天でも戦いが起こりますが、神の勝利の後地上に平和が訪れ、神の玉座の前で最後の審判が行われます。全ての死者が復活し、生命の書が開かれます。ここに名前が無い人は火の池行き。そして新しい都が天から降りてきます。生前に善き人であったならば、この新しい都で、神と共に永遠に暮らすわけです。ヴェルディは自分の作品の中にこの終末の日を表す「Dies irae 」を典礼書にない箇所に２度ほど挿入しています。こうして激しいDies irae の旋律で曲全体を印象づけました。ヴェルディは「最後の審判」の恐怖を描きたいのでしょうか。あるいは、人の死に際して狂いそうにまで乱れる自分の心を描いたのでしょうか。

人間にとって愛する人が亡くなることが悲しいのは自然な感情です。キリスト教の教義からすればそんなに悲しみをもたないとしても、人の手によって作曲されたレクイエムは悲しみをもっていることも自然でしょう。聖書も死者のために涙することを否定していません。残された人は悲しみを乗り越え歯を食いしばり懸命に生きていかなければなりません。ヴェルディはマンゾーニの死に際し悲しみのあまり葬儀に参列することさえ出来ませんでした。しかしヴェルディは生きていかなければなりません。孤独と悲しみのさなかにヴェルディはそれに耐えてこの作品を生み出しました。それゆえにこの作品は悲しみを乗り越える力を持ったと思われます。クリスチャンでない我々にも深い感銘を与えるのは、生きている人へ生きる力を励ます音楽だからではないでしょうか。私たちはこう考えるから友好コンサートとしてこのレクイエムを演奏しうると考えています。

ヴェルディのレクイエムは、あまりに劇的・オペラ的で宗教曲ではないといった議論をよく見かけます。あるいは、システィーナ礼拝堂にあるミケランジェロの「最後の審判」にたとえられたりします。「劇的であるがゆえに宗教的でない」といった風の議論は無益でしょう。劇的であることと宗教的であることは止揚されうることです。

またタロッツィは「評伝・ヴェルディ」の中でミケランジェロとの比較議論を否定していますが、それは説得力を持っています。リベラメの最後はソプラノのハイＣへ登る旋律をＴｕｔｔｉでそれを支え、その後のppp による同音が列ぶ旋律で全曲が終わります。人間の感情の爆発とその後に得られる平静心を見事に表しています。曲の冒頭では呆然としたが、曲中悲しみや孤独・恐怖としっかり向き合い、最後にはそれらを乗り越え心静かになる。全体として人間の尊厳が見えてくるようです。１９世紀イタリアの独立運動期にその作品で国民を励まし続けたヴェルディだからこそ書き得たレクイエムです。宗教的であるないとか、オペラ的であるないといった次元を超えた作品なのです。

神山 達志 （大阪第一合唱団 副団長）

参考文献：旧新約聖書（ドン・ボスコ社）／評伝ヴェルディ（草思社）／天使（新紀元社）／死その謎と秘義（新教出版社）

SMH
JAPAN

SMHとは、スイスマイクロエレクトロニック時計総連合(Société Suisse de Microélectronique et d'Horlogerie SA.)の略称。1983年の設立以来、文字通り、スイス時計を中心にしたエレクトロニクス、精密機器などを扱うスイス最大のグループとして幅広い分野での活動を展開しています。そして今や、SMHの使命は、伝統的な精密技術産業である時計の優秀性を世界各国に紹介することだけにとどまりません。近年では時計以外の分野へも積極的に進出。地球環境問題への強い関心から、グループの一翼を担うスウォッチと独メルセデス・ベンツ社共同によるハイブリッド超小型車の開発、あるいは独ジーメンス社とのテレコミュニケーション分野など、新たな事業へも取り組んでいます。スイス時計を語るに欠かせない存在から、世界が、そして地球が、より良い発展を遂げるために欠かせない存在へ。SMHは、常に未来に視野を向けています。

SMH SMH JAPAN K.K.
株式会社 SMHジャパン

1995年5月、大阪第一合唱団は、
スイス・ビール市立歌劇場専属第一指揮者として活躍する阪哲朗氏とのご縁で
ビール市コングレスハウスにて、第１回日本スイス友好コンサートを開催し、
「ベートーベン第九交響曲」を演奏しました。
２年後の今年、大阪と京都で開催する第２回日本スイス友好コンサートでは
その時のソプラノソリストであったユーディット・グラフさんと、
メゾソプラノのマリオン・アンマンさん、
一緒に歌ったレアゲザングフェライン、テアターコアの２つの合唱団が来日し、
ヴェルディ・レクイエムを演奏します。
音楽を通じて生まれた私たちの友情は、
再び共に音楽を演奏することで、よりいっそう厚いものとなることでしょう。
なお、第１回・第２回とも、コンサートに先立ち、
大阪市長とビール市長の間で親書が交わされています。

友好コンサートの開催にあたり、格別のご支援を賜りました
ベアト・ホイス　スイス総領事、宮地俊雄　株式会社ＳＭＨジャパン社長をはじめ
外務省、大阪府、大阪市、関西・日本スイス協会、
コスモスクエア国際交流センター等、関係者の皆様に
心より御礼申し上げます。

DAICHI